

# プラセンタは 万能の臓器

吉祥寺中医クリニック(東京都) 長瀬 眞彦

プラセンタ(Placenta/英語)とは哺乳動物の「胎盤」のことである。人間の場合、胎盤の働きによって直径約0.1mmの受精卵が10ヵ月程度で約3~4kgの胎児へと成長する。発育に必要な各種臓器の機能がまだ十分に備わっていない胎児では、胎盤がさまざまな臓器の機能を代用する。胎盤は「万能の臓器」なのである。

プラセンタは古くから生薬としても用いられ、「本草綱目」(李時珍、1596年)にはヒト由来の生薬の項目に「人胞(じんぼう)」の名で収載されている。別名として、胞衣(ほうい)、胎衣(たいい)、紫河車(しかしゃ)、混沌衣(こんとんい)、仏袈裟(ぶつけさ)、仙人衣(せんじんい)の記載もあるが、その中でも「紫河車」が一般的となり現在に至る。紫河車は、気血水のすべてを補う非常に優れた補正の作用をもつ。陰陽のバランスを調整する作用があり、弱った機能や組織の修復、不足した成分を体自身が作るように組織を刺激するなどして、自然治癒力を高めることが期待されている。効用は、「温腎補精」「益気養血」「安心」であり、なかでも安神作用に優れているといわれている(表1)。

豊富な栄養素が含まれるプラセンタには、細胞

表1 プラセンタの生薬としての特性

四気	温	じっくり温めるのにすぐれ、冷えからくる症状を改善に向かわせるように作用
五味	甘	正気を補い、免疫力を高めるように作用
	鹹	ものを和らげる。腫瘍のような塊を溶かす作用
効用	温腎補精	腎を温め、精を補うことから、腎臓病、腰痛、老化、冷え症、月経関連症状、不妊等の改善につながる
	益気養血	気・血をともに補うことから、活力の増大につながる
	安心	「心」を安定させることから(安神作用)、精神不安や更年期障害、不眠、自律神経失調症等の改善につながる

◎) プラセンタ療法と中医学の調整作用、ハート出版、長瀬 眞彦著

表2 プラセンタの薬理作用

- 自律神経調整作用
- 内分泌調整作用
- 免疫賦活・調節作用
- 基礎代謝向上作用
- 抗炎症作用
- 強肝・解毒作用
- 活性酸素除去作用
- 血行促進作用 等

◎) 更年期障害、疼痛、美容などにプラセンタ療法、ハート出版、長瀬 眞彦著

増殖因子の産生を誘導する可能性が示唆されている。そのため、最近では、肝機能の改善や更年期障害、乳汁分泌不全以外にも広く活用されている(表2)。例えば皮膚科領域では、肌トラブルの一つであるシミに対して、プラセンタのもつ活性酸素除去作用<sup>1)</sup>、抗炎症作用<sup>2)</sup>、そして新陳代謝を高める血行促進作用等によりメラニンの産生が抑制され<sup>1)</sup>、シミの予防や改善が報告されている<sup>3, 4)</sup>。また活性酸素除去作用に加えて、線維芽細胞の増殖促進作用<sup>5)</sup>が示唆されており、コラーゲン合成の促進<sup>5)</sup>など真皮の構成物質を内側からつくりだすことから、保湿能の改善やシワ増加予防の傾向も報告されている<sup>3, 4)</sup>。

アンチエイジングや美容などの目的でプラセンタの効果を期待する場合には、毎日服用を続けることで効果が現われやすくなるようであり、品質が保証されたサプリメントや健康食品などを活用するのの一考である。

プラセンタには多くの可能性が秘められている。プラセンタを安全かつ有効に活用するために、臨床報告の蓄積が切望される。

【参考文献】

- 1) 山崎正博 ほか: プラセンタエキスの持つ抗酸化酵素遺伝子の発現誘導能, *Fragrance journal* 42(12): 20-25, 2014
- 2) 伊東泰美 ほか: プラセンタエキス中の活性成分の検討—炎症に対するプラセンタエキスの効果—, *日本化粧品技術者会誌*, 27(3): 506-513, 1993
- 3) 佐藤三佳子: タブプラセンタエキス摂取による色素沈着予防作用, *機能性食品と薬理栄養*, 6(3): 199-203, 2010
- 4) 坪井 誠: プラセンタ経口摂取による肌状態改善効果, *Food style* 21, 13(6): 73-75, 2009
- 5) 里 史明 ほか: プラセンタエキスの皮膚線維芽細胞に与える効果, *薬理と治療*, 42(10): 735-738, 2014

